

第四章 災害

第一節 自然災害

近代の災害は、自然災害と人災の複合で発生することが多い。自然災害のうち風水害などの気象に起因するものを気象災害、地震によるものを震災などと原因となる現象によって細分される。

本町に発生した災害は、主に台風による暴風雨・洪水・高潮及び干害による農作物の被害などの気象災害の記録が最も多い。

日本の気象災害の多い理由として、冬は大陸、夏は太平洋から吹く季節風が優勢で、前線や低気圧が発生、発達して頻繁に通過する。そのうえ、台風の通路にあたりなど、異常気象の起こりやすいきびしい気象環境にある。

い。例えば「水稲が干ばつに不作なし」といわれるのは、近代的土地改良事業や用水工事によって、水利用が合理化されたからである。

しかし、干害対策の進んでいない畑作物、柑橘類などは、干ばつになると被害が大きく干害になりやすい。

水稲干害の場合は、地面からの蒸発量や気温が重要な要素であり、高温でしかも少雨となれば干害になる率は高くなる。

特に、冬から春にかけて雨量が少なく、土壌水分の不足が続ぎ、更にその年の夏が高温少雨であれば、大干ばつとなり干害が発生する。この現象と反対の場合は、その夏が少雨であっても干害にならないことが多い。

多度津測候所の資料によると一―三月の降水量の合計が、一四〇mm以下の年の一七回のうち夏干ばつになったのは八回、一四〇mm以上の年では四一回のうち、二回にすぎない。香川県で干害が起こるかどうかの目安として、五―八月の合計雨量が三一〇mm以下（大後、鈴木一九四九）六―八月の合計雨量が三〇〇mm以下（合田一九五〇）が、干害発生の限界値とされている。

明治元年（一八六八）以後、県下にもたらした暴風

日本は、地形が急峻なため、局地的な気象変化を与えるばかりでなく、急流河川が多く山地にはもろい地質構造の所が多いため、河川の氾濫及び山・崖崩れや、土石流が発生しやすい。また、周囲を海にかこまれているため海岸地方は、高潮による被害を受けやすい。しかも、国は狭く、人口が稠密で国土のすみずみまで活用しているため、ひとたび災害が発生すると、その被害は意外に大きくなる。

「梅雨」が明けると太平洋高気圧におおわれるが、この高気圧の勢力が異常に強い年は晴天が続ぎ、雨は降らず「干ばつ」となり、水不足で干害が発生する。「干魘」の言葉は「干」は日照り「魘」は日照りの神の意味で、日照りによる被害を悪神の仕業とみたのに基づく用語である（大後美保）。

干害は、水利用にかかわるところが大きく、干ばつになったからといって、必ずしも干害になるとは限らな

雨・干ばつに関する災害状況を、発生年月日順に表に記載する。

参考資料・香川県（県警本部・地方課災害調査及び土木史・近代史・用水史等）
高松気象台・多度津測候所（気象年表・日表・異常気象と気象災害等）
引田町（相生・小海）議会事務報告書及び近隣町史その他公共機関の災害調査（明治と昭和二〇年前後は、資料が少なくてよくわからない）

和 暦	西 暦	災 害 状 況
明治三年	一八七二	夏期干天続く
明治五年・八・三五	一八七四	県全域暴風雨
明治六年 辛 七月	一八七五	干天が続ぎ田植え困難
明治九年 乙 八月	一八七八	七月八日～八月二八日間干天が続ぎ 稲作収穫皆無の所がでた 地租の延期・年賦納となった者多数
明治三年 乙 九月	一八七二	六月空梅雨 五三日間干天が続く 農作物被害多出
明治六年 乙 九月	一八七五	五八日間干天が続く 農作物被害甚大
明治七・八・三五 九・二五	一八七六	県全域暴風雨 愛媛県から多額の粉米の交付をうけた

明治六年 七・一～二	一八五	台風が紀伊半島上陸 県全域暴風雨
明治九年 六～八月	一八六	七〇日間干天が続く 農作物被害多出
明治三〇・八・一八～九	一八九	台風が四国東部を北上 県全域暴風雨
明治三三年 七～八月	一八九	六〇日間干天が続く 農作物被害甚大
明治三三・九・一六	一八九	県全域暴風雨
明治三三・七・三～三	一九二	県全域暴風雨
明治三六年 六～八月	一九三	三八日間無降水 農作物被害甚大
明治三六・〇・四～五	一九三	県全域風水害
明治三七年 四～九月	一九四	一三五日間干天と高温の日が続いた 七～八月は平年より二度以上高く 用水が欠乏 井戸水も涸れ 稲の収穫皆無の田畑が出た 百年來の大干害
明治三六・七・二四	一九五	県全域暴風雨
明治三六・八・三〇	一九六	台風が潮岬付近上陸 県全域暴風雨
明治三〇年 七～八月	一九七	干天少雨 県東部農作物被害多出
明治三〇・九・元	一九七	台風四国南海上を東進 県全域暴風雨
明治三三・八・二五	一九〇	県全域暴風雨
明治三三・九・一七	一九〇	干天小雨 農作物被害多出
明治三三・九・二七	一九〇	県全域暴風雨
明治三七年 七～九月	一九四	夏期干天小雨 農作物被害甚大
明治三〇・二・二四	一九六	県全域暴風雨 小海坂トンネル崩壊 引田町雨量七九・二 ^リ
明治三〇・八・二四～五	一九七	県全域暴風雨 引田町雨量一九三・六 ^リ
大正元・九・三～三	一九三	台風四国東部北上 相生村海水の浸水破損二三か所 田畑冠水 一五町 堤防決壊六四四間 流出家屋一軒 引田町雨量三四〇・四 ^リ
大正二年 六～八月	一九三	無降水三〇日以上 用水欠乏 米収穫不良 小海村山間部被害甚大 相生村は六二町六反余歩の地租免除 県技師が来村し築池の設計申請
大正四・八・四～五	一九五	県全域暴風雨(第二節(1)に詳細記述)

大正六年 六～八月	一九七	空梅雨 七月は二日間の降雨以外雨なし 干天が続き農作物被害多出
大正六・八・三	一九七	台風四国東部北上 県全域暴風雨 引田町雨量一七八 ^リ
一〇・一〇		県全域暴風雨(第二節(2)に詳細記述)
大正七・七・二～三	一九八	台風三回襲来 県全域暴風雨(第二節(3)に詳細記述)
大正八・九・二四	一九九	県全域暴風雨 引田町雨量一八二・三 ^リ
大正二年 五～六月	一九三	五月下旬から六月にかけて干天が続く 稲苗移植の適期を失した
大正二・七・四	一九三	県東部集中豪雨 引田町雨量一四〇・六 ^リ
大正三・九・二四～五	一九三	県東部集中豪雨 相生村の稲作被害は収穫皆無一九六反 八割減一八一反 七割減二七八反 六割減二〇八反 五割減一八三反 四割減七八七反 被害総数一八三三反 引田町雨量一七〇・五 ^リ
大正三三・六～八月	一九四	空梅雨のうえ土用照りこみ 六～八月の雨量は平年の三〇 ^リ と
大正三三・七・六	一九六	県下に集中豪雨 引田町雨量一六一・四 ^リ
大正三三・七～八月	一九六	七月六日大雨以後干天続く 特に八月少雨 農作物被害多出
昭和四年 六～八月	一九六	空梅雨のうえ六～八月日照り続き 高温干天少雨、農作物被害多出
昭和四・〇・三～六	一九六	県東部集中豪雨 土砂崩壊のため高徳線(白鳥―引田間)一時
大正三三・二・〇・八	一九四	少雨干天続く 特に六～七月は高温少雨 農作物被害甚大 八月一七日～二十四日菅田神社で雨乞祈とうを行う
		県東部暴風雨 集中豪雨のため百年以来の大洪水となる 塩屋川・大川共に増水はん濫 消防・町民の総出動により堤防決壊は防止できたが、塩屋橋流失 御幸橋大破損
		小海村は大洪水により川原谷の道路が損壊 災害復旧のため翌年七月二三日起重工 八月二〇日竣工 総工費一三〇〇余円 大正一五年四月工事概要を記した記念石碑が建立された
		引田町雨量一一九・五 ^リ

昭和六・一〇・三	一九三	不通となる 県全域暴風雨 安戸池の堤防が決壊し、多数の魚類流失、引田町雨量一六三 ^ミ 、
昭和七・九・八、九	一九三	県東部集中豪雨、相生村坂元川・本村川の護岸が破損、護岸復旧工事竣工は、坂元川昭和八年二月二十八日、本村川同年三月三〇日、総工費三九三円、引田町雨量一八〇 ^ミ 、
昭和八年七月八月	一九三	夏期干天少雨、農作物被害甚大、相生村の干害甚大のため、長尾税務署が干害地踏査に来村、第一耕地整理区内は地租免除、地積一九町七反八畝二四歩、賃貸価格三三・一三円、
昭和八・一〇・三	一九三	台風四国横断、県全域暴風雨、
昭和九年六月八月	一九三	夏期干天少雨、農作物被害甚大、
昭和九・九・三	一九三	室戸台風襲来、県全域暴風雨、
昭和一〇・六・七、三〇	一九三	梅雨前線に伴う集中豪雨、引田町雨量八九・七 ^ミ 、
八・二六、元	一九三	台風四国縦断、県全域暴風雨、
昭和一〇・一〇・三	一九三	引田町雨量一五三 ^ミ 、 県全域暴風雨、引田町雨量一八
昭和三・九・二〇、二	一九七	五・一 ^ミ 、 台風四国西部に上陸、県全域暴風雨、相生村は農作物に多大の損害を受け、稲作は約三割の減収、引田町雨量一一八・九 ^ミ 、
昭和三・七・三、五	一九六	梅雨前線の活動が活発なため、県下に集中豪雨、引田町雨量一二九・二 ^ミ 、
九・五	一九六	台風四国東部に上陸、県下全域暴風雨、(第二節(5)に詳細記述)、
昭和四・五、九	一九六	大干ばつ、農作物被害甚大、
昭和六・八・二五、二六	一九四	(第二節(6)に詳細記述)、
昭和七・九・二〇、二	一九四	台風四国東部北上、県全域暴風雨、
昭和八・七・二五、二六	一九四	県全域暴風雨、
九・二〇	一九四	台風四国西部に上陸、県全域暴風雨、
昭和九年七月八月	一九四	台風宿毛市付近に上陸、県全域暴風雨、
昭和一〇・九・七、一六	一九四	夏期干天少雨、農作物被害多出、作付不能の田畑が多く、小海村別惣地区の田畑は収穫皆無、
一〇・一〇、三	一九四	枕崎台風襲来、県全域暴風雨、 阿久根台風襲来、県全域暴風雨、

昭和三・七・二五、三〇	一九四	台風九州東部縦断、県全域暴風雨、
昭和三・七・九	一九四	県下に集中豪雨、引田町雨量七二・一 ^ミ 、
昭和三年七月八月	一九四	七月九日降雨以後干天少雨、農作物被害多出、
昭和四・七・元	一九四	台風(ヘスター)襲来、県全域暴風雨、引田町雨量一〇七・一 ^ミ 、
八・六	一九四	台風(ヘレン)襲来、県全域暴風雨、引田町雨量一〇七・一 ^ミ 、
九・二、四	一九四	熱帯低気圧のため県東部集中豪雨、
九・二、四	一九四	台風(ジェーン)襲来、県全域暴風雨、引田町雨量一四三 ^ミ 、
九・二、四	一九四	台風(キシア)襲来、県全域暴風雨、引田町雨量一三一・三 ^ミ 、
昭和六・七・七、七	一九三	梅雨前線に伴う集中豪雨、引田町雨量二一五・二 ^ミ 、
一〇・一三、一五	一九三	台風(ルース)襲来、県全域暴風雨、引田町雨量一四九・八 ^ミ 、
昭和三年七月八月	一九三	梅雨明け後七・二、一、八・二、九、干天少雨続き、農作物被害甚大、八月は高温少雨、七月下旬から八月一五日まで無降水、
昭和七・六・三、三、四	一九三	台風(ダイナ)襲来、県全域暴風雨、引田町雨量一九六・七 ^ミ 、
七・一、二	一九三	梅雨前線に伴う集中豪雨、引田
昭和六・九・二四、二五	一九五	町雨量一八七 ^ミ 、 台風一三号(テス)襲来、県全域暴風雨、(第二節(7)詳細記述)、
昭和六・六・元	一九五	梅雨前線に伴う集中豪雨、引田町雨量八八・四 ^ミ 、
九・二、三	一九五	台風一二号のため県全域暴風雨、引田町雨量一〇八 ^ミ 、
九・二五、二七	一九五	台風一五号(洞爺丸台風)襲来、県全域暴風雨、
昭和三年七月八月	一九五	二八日三市二九町村、二九日一市九村に「災害救助法」適用、引田町雨量一〇六・九 ^ミ 、
昭和三年七月	一九五	夏期干天少雨、農作物被害多出、七月一二日梅雨明け後八月一五日まで無降水干天続き、雨量半年の四〇 ^ミ 以下、
昭和三年七月	一九五	春から梅雨期にかけて干天少雨、農作物被害甚大、
昭和三・八・三、三、五	一九五	台風一七号のため県全域暴風雨、引田町雨量一四六・七 ^ミ 、
昭和四・八・八	一九五	台風六号、県全域暴風雨、引田町雨量一三一・六 ^ミ 、
九・二六、二七	一九五	台風一五号(伊勢湾台風)県全域暴風雨、引田町雨量二一四・五 ^ミ 、
昭和五年七月八月	一九六	七月一三日、八月二八日干天少雨、農作物被害多出、

第1編 自然・環境

昭和五〇・八・二六～二九	昭和五〇・九・二六	昭和五〇・二七～二八	昭和五〇・八・九月	昭和五〇・九・二四～二五	昭和五〇・九・二〇	昭和五〇・九・二〇	昭和四九・九・三三～三三	昭和四九・九・三三～三三	昭和四九・八・三三～三五	昭和四九・八・三三～三五	昭和四九・七・九～三三
一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇
台風一六号 県全域暴風雨 引田町雨量一二二 ^ミ	台風一八号(第二室戸台風)による暴風雨 前線に伴う集中豪雨(第二節(8)に詳細記述)	夏期干天少雨 農作物被害甚大 引田町の八・九月合計雨量五九 ^ミ と極少雨	台風二〇号 県全域暴風雨 引田町雨量一〇七 ^ミ	台風二三号による県全域暴風雨及び九月一三日～一七日台風二四号による集中豪雨(第二節(9)に詳細記述)	台風二四号 県全域暴風雨 引田町雨量一八四 ^ミ	夏期干天少雨 農作物被害甚大	台風一〇号 県全域暴風雨 台風一九号 県全域暴風雨 引田町雨量一一八 ^ミ	台風二三号 県全域暴風雨 引田町雨量二六八 ^ミ	梅雨前線が西日本に停滞 県東部集中豪雨 大雨による海水塩		

七・三～八月下旬	九・二四～二六	昭和四九年六～八月	昭和四九・七・五～七	昭和四九・七・五～七	昭和四九・八・三～九	昭和四九・八・三～九	昭和四九・八・三～九	昭和四九・八・三～九	昭和四九・八・三～九	昭和四九・八・三～九	昭和四九・八・三～九
一九六〇	一九六〇	一九五九	一九五九	一九五九	一九五九	一九五九	一九五九	一九五九	一九五九	一九五九	一九五九
分低下のため 引田町・直島町ハマチ被害額五億三〇〇〇万円 赤潮発生 県下のハマチ養殖被害額三二億円「天災融資法」が適用された 引田町雨量一二〇 ^ミ	台風二〇号 県全域暴風雨 引田町雨量二九四 ^ミ	全国的な干天(ばつ) 香川県「激じん法適用」地域に指定された	台風八号 県全域暴風雨 高徳線白鳥引田間二万立方崩壊 高徳線・国道一〇号線不通 引田町雨量三三一 ^ミ 一時間雨量六三 ^ミ (災害写真掲載)	台風一六号四国横断 県全域暴風雨	台風一八号土佐湾を東進 県全域暴風雨 引田町雨量一五〇 ^ミ	台風五号宿毛市上陸 県全域暴風雨 引田町雨量一六六 ^ミ	台風六号徳島県蒲生田岬上陸 県全域暴風雨 引田町雨量二一〇 ^ミ	台風一七号九州南西海上に停滞 県全域集中豪雨(第二節(10)に詳細記述)			

第4章 災 害

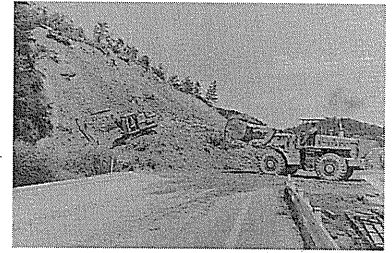
昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月	昭和五五年 七～八月
一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六
夏期干ばつ少雨 農作物被害甚大 冬期から少雨 夏期は平年の三〇 ^ミ 以下の少雨 連日高温 続き 月平均気温は平年より一～二度高い	七月一九日～八月二六日干天少雨 農作物被害多し 七・八月の雨量は平年の五〇 ^ミ 以下	台風一六号室戸岬上陸 県全域暴風雨 引田町雨量二七三 ^ミ 一時間九四 ^ミ 最大風速西北西一四 ^ミ	台風二〇号和歌山県白浜町上陸 県全域暴風雨 引田町雨量一八八 ^ミ 最大風速東南東一〇 ^ミ	台風一三号 県全域暴風雨 引田町雨量一八八 ^ミ 最大風速東南東一〇 ^ミ	六月一五日～七月六日干天少雨 農作物被害多し 六月の降水量六六・五 ^ミ 平年の四一 ^ミ 水稲四六・七 ^ミ が水不足で作付不能	台風一九号 県東部暴風雨 引田町雨量二二四 ^ミ 最大風速東南東一〇 ^ミ	七月二二日～九月一九日干天少				

昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇	昭和五〇・六・元～三〇
一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇	一九六〇
川用水の取水規制が行われた	台風六号四国南海上に北東進 県内各地大雨 引田町土砂崩壊 県道一時不通 引田町雨量九九 ^ミ 最大風速西七 ^ミ	台風一九号四国東部北上 県全域暴風雨 引田町雨量二四四 ^ミ 最大風速西一〇 ^ミ	台風一七号室戸岬上陸 県全域暴風雨 引田町雨量一九一 ^ミ 最大風速一〇 ^ミ	台風一四号豊後水道北上 県全域暴風雨 引田町雨量六八 ^ミ	台風一九号和歌山県白浜町上陸 県全域暴風雨 引田町雨量四四 ^ミ	台風一九号九州佐世保市上陸 県全域暴風雨 引田町雨量一二三 ^ミ 最大風速南一四 ^ミ	台風一〇号熊本県玉名市上陸 県全域暴風雨 引田町雨量三七 ^ミ 最大風速南南東一一 ^ミ	台風一〇号 引田町雨量三三 ^ミ	台風一〇号 引田町雨量三三 ^ミ	台風一〇号 引田町雨量三三 ^ミ	台風一〇号 引田町雨量三三 ^ミ

昭和49年（1974）7月6日台風8号災害



菽山崩壊(高德線及び国道11号不通)



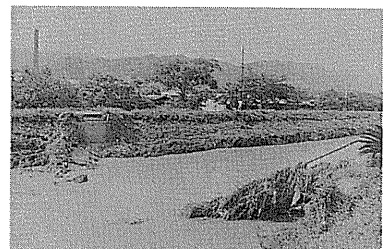
復旧作業急ピッチ



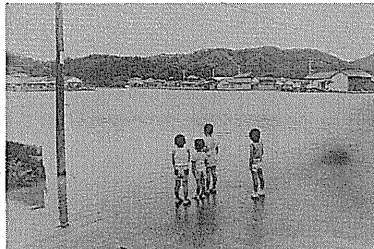
大樹折倒 家屋半壊(宮ノ後)



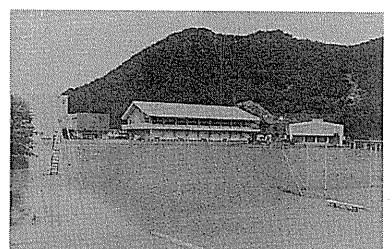
塩屋橋流失



曙橋流失



田畑水没(安戸から東を眺む)



引田中学校浸水

第二節 顕著な暴風雨災害及び干害事例

前節に記載した表及び参考資料により、我が町に襲来し災害をもたらした台風、また干害の事例・写真を掲載する。

一 大正四年（一九一五）八・九月台風災害

八月四日土佐湾に襲来した台風が五日早朝、四国東岸をかすめて北上し淡路島から、中国地方を横断し、日本海に抜けた。このため、県全域が暴風雨となる。

特に県東部の風水害ははなはだしく、相生村では四日午前七時ごろから南東の暴風雨が強まり、出水のため馬宿川七か所、佃川（相生漁港西）一か所が決壊した。また、隔離病舎も危険な状態になった。このときの引田町の雨量一五二・五^ミの大雨であった。

また、九月八日午後二時、鹿児島県大隅半島に上陸した台風は九州東部を北上し、周防灘から中国地方西部に

再上陸後、日本海に抜けた。この台風による災害の特徴は、県東部は暴風、西部は高潮被害である。

特に東讃地方の南東風は強く、三本松（東讃気象観測所）では、八日午後四時最大風速（秒速）は南東風二八・六^ミを記録した。雨量は引田町で五二・五^ミと大したことなく、暴風被害である。

風水害は大川郡南東部で、八日午前五時から九日午後一時ごろまで南東の暴風が吹き荒れ、水稻被害ははなはだしく、小海村は特に損害がひどかった。相生村は五割減で、川股・坂元の被害は甚大であった。そのうえ製材工場二棟・隔離病舎付属建物炊事場一棟が倒壊・本建病室屋根が破損した。

二 大正六年（一九一七）一〇月宗極池決壊

一〇月一〇日午後、鹿児島県大隅半島をかすめて日向灘に進んだ台風は、土佐湾から紀伊半島に進んだため、県全域が暴風雨となった。

特に東讃地方が暴風雨圏に入り、引田町では雨量二三七・五^ミの集中豪雨となり、河川増水・堤防決壊・橋梁

第1編 自然・環境

流失・家屋・田畑浸水等の大被害が出た。特に相生村は坂元川上流の宗極池の堤防決壊により、大被害を受けた。宗極池は、相生村耕地整理組合が数年間を費やして築造したもので、灌漑区域七〇余町歩を有する大溜池である。この暴風雨により下流耕地の全部が荒廃し、家屋の流失などの大惨事となった。また相生村大字南野の県道の橋三か所（井関・堀切・菜切）が流失し、不通となった。

その当夜の災害経緯を永峰孝象の「相生史」によると

。 一〇日午後三時、豪雨に危険を感じ、永峰工事係、桑島庶務係ほか人夫四名宿直し池の保護に努む。
。 午後七時、ますます風雨強まったため、全排水能力を施したが増水おびただしく、余水吐き以下一尺（三〇・三センチ）を余すだけとなった。
。 午後八時、余水吐で放水を見る。
。 午後九時、一尺の水深をもって余水吐より流水。
。 午後一〇時 三尺の水深をもって余水吐より流水。
。 午後一〇時一〇分 いよいよ危険な状態におちいり、増水すること一〇分に三寸（約一〇センチ）を示し、堤天以下一尺五寸（四五センチ）を余すだけとなる。このとき、堤防決壊を予知し、人夫に池下の人家に立退きを通知、同

時に浜垣組合長に急報する。
。 午後一〇時三〇分 南野・黒羽の消防組を召集し人家立退きの手伝いなく警鐘をもって集合に努むるも、暗夜と暴風雨に妨げられ一部の組合員集合にして予定の行動を不可能に終わらせた。
。 午後一一時、溜池水は堤天より一寸に達し、通行を禁止する。
。 一一日午前〇時五分 溜池水は堤天より二寸に達し危険いよいよ切迫する。
。 午前〇時四〇分 ついに仮余水吐より決壊しはじめ、午前一時、全溜水流失し終わる。
。 午前一時四〇分 消防組員を救護派遣する。人命に死傷なきは不幸中の幸いであった。
と、記載されている。

相生村「議事事務報告」によると、その当時の大まかな調査損害高は、荒廃地全部五一町（被害総額約二〇万円）、流失棟数（住宅三戸、付属建物一五戸）、崩壊棟数（住宅三戸、付属建物七戸）、浸水家屋（床上三五戸、床下六七戸）である。

なお、宗極池復旧工事費予算は二万三六〇〇余円にて大正七年（一九一八）度着手し、大正一二年に完了す

る。

三 大正七年（一九一八）七・八・九

月台風災害

七月一二日 日向灘を北上した台風が、四国西部をかすめ中国地方西部から日本海に抜けた。このため県下全域暴風雨となり、特に県東部の被害は大きかった。

引田町の雨量一五二ミリ、三本松の最大風速（秒速）二六・四メートル

今回の災害に伴う米価高騰に伴い 人民が困窮している様子を聞き、これを救おうと考えられて天皇の手もとにある金一七〇円が下付された。八月三〇日相生尋常高等小学校において伝達式を行った。米・麦を購入し、六八戸（二五四人）に分配した。

八月二九〜三〇日、日向灘を北東進した台風は、四国東部から更に近畿地方に上陸、三陸沖に抜けた。このため県全域暴風雨となり各地に大きな被害が続出した。

重なる災害による米価の高騰に関する困窮者救済の資金としての寄付金七三円が配当され、該当者四四戸（一六四人）に分配された。また天皇・皇后両陛下より御下

賜金三円配当されたので被害甚大な二名に分配した。

九月一四日朝、土佐湾を北上した台風は、紀伊水道から大阪付近に上陸後日本海に抜けた。このため県全域暴風雨となり各地に甚大な被害をもたらした。（引田町の雨量は一一九・五ミリである。）

今回の被害者に対し 御下賜金一円五〇銭の配当があった。

四 昭和九年（一九三四）夏期干ばつと室戸台風災害

五月一三日降雨のあと、梅雨期間の雨量は極めて少なく（引田町の五月一四日〜六月一四日の合計雨量は九五ミリ、六月二五日〜七月一〇日は降雨なし）約六〇日間の干天が続いた。しかし七月一二日から一三日には雨が降り、一斉に田植えをした。その後四八日間干天が続く（七月一四日〜八月三〇日の合計雨量は六八・五ミリと少雨）、一〇八日間の高温（五月〜八月の平均気温は、平年に比べ一〜二度高い）の干ばつにより農作物の被害が著しくなった。

県は八月三〇日より三日間、各市町村においてかがり

第4章 災 害

第1編 自然・環境

火を焚き、一斉に雨乞い祈願を行うよう伝達した。引田町においても雨乞いの行事を行った。九月に入り五八日の雨が降り、長い干ばつも解消したが、稲作の被害は大きく、収穫皆無の田地もあった。

長い干ばつ苦より生きかえる思いをしたおり、九月二日早朝土佐湾に北上してきた猛烈な台風は午前四時三〇分ごろ室戸岬の西方、奈半利町付近に上陸し、同六時三〇分ごろ徳島市の西側を経て、淡路島を縦貫して神戸・大阪の中間付近に再上陸した。

このため県全域は大暴風雨となり、多度津測候所では、午前六時北北西三二・六分同六時三六分最大瞬間風速三八・五分を記録し、海に陸に未曾有の災害を被った。この台風は室戸台風と命名された。

特に台風を中心に近い県東部の被害は大きく、沿岸一帯は高波による損害著しく、引田港護岸は、一一九・五分がわたり大破損し、安戸池海岸防波堤一号く三号が破壊された。相生村では、家屋倒壊のため、一名死亡、三名が重傷を負った。

五 昭和十三年（一九三八）九月台風災害

九月五日早朝四国東部に上陸した台風は、徳島市の西方約八分を通過し、正午すぎ引田町の東方一〇分付近を北上、播磨灘から兵庫県西部に再上陸後日本海に抜けた。このため、東讃地方の風水害は激甚を極めた。この時の雨量は一四一・三分である。

多度津測候所員の引田付近の現地踏査による被害報告は次のとおりである。

引田 五日午前八時頃より北東風次第に募り同十一時頃より風勢猛烈、豪雨を注ぎ屋根、瓦、壁等の飛散落剥甚しく佐野織物会社の煙突（高さ約一〇米）は南方に倒壊し小学校庭の国旗掲揚台取付石は折れ木柱と共に倒れ又同校講堂は南方に稍傾きたる為補強の要ありと云う。十一時三十分校舎動揺の為時計止り、村内にても諸所にて時計止りたりと云う。而して午後一時過ぎ暫く風和ぎ雨も小降りとなりたるも后再び西風猛烈に吹き荒びしとなり、相生及び三本松に於いても同様の現象あり、当時台風中心の甚だ接近せるを示す。尚津田以東の各地にては樹木の折倒もあり、大川郡富田村神社境内の周囲二丈余に達する老松、小海村神

社内の経二尺の櫓の倒れたるが如きその主なるものなり。この他電柱の倒壊、電線の切断等多数に昇り又納家、物置等の倒壊等ありたり。

幸いに干潮時で高潮の被害は比較的軽微であったが、川向い港湾防波堤が約一一九分がわたり破損した。県補助費を受け工事費二六三三円を支出、昭和十五年（一九四〇）二月二十九日に復旧工事が完了した。小海村では、別惣川、柞川護岸が破損、県補助を受け補修工事を施行した。

六 昭和十四年（一九三九）夏期干ばつ

引田町の平均年間降水量は、一二四〇・四分であるが、昭和十四年は、九一九・一分と平年の約七四分であった。特に五月く八月の四か月間の合計降水量は、平年は五四三・二分であるが、同年は、一六五・一分の少雨で平年の約三分と寡雨・干ばつの様相が十分うかがえる。

この年の引田町における五月く八月の天候については、五月は雨なし干天日数は二六日、降水量は三七・九

分平年の約三一分平均気温は平年より約一度高く著しい寡雨高温が続いた。六月は雨なし干天日数は二二日、降水量は九二・一分平年の約六〇分平均気温は一度余り高く、日照りが続いた。下旬に梅雨入りし時々降雨はあったが、量が少なく水不足で、六月末まで県下で田植えができたのは、平年の五〇分程度であった。七月は雨なし干天日数は二三日、降水量は一一・四分、平年の約一〇分以下、月中ごろ梅雨明けとなり、平均気温も平年より二度余り高く、連日三〇度以上の高温日照りの酷暑・寡雨が続き、近年稀なる干ばつとなった。

このため、七月二三日県知事は滝宮天満宮で雨乞いの祈願を行った。八月は雨なし干天日数は二二日、降水量は二三・七分平年の約二〇分、平均気温は平年より二度余り高く、日照りが続き五月以来の干ばつはいよいよ深刻となり、県下の池や井戸は、ほとんど涸れ、飲料水にも事欠くようになった。この大干ばつは多度津測候所開設以来のことである。

八月三日、県は各市町村に対し雨乞い祈願を通達し、各神社、寺院において盛んに雨乞い行事が行われたが、祈願の効果なく、枯死した水稲面積は増えるばかりで、

第1編 自然・環境

水争いも起こるありさまであった。
県参事会は、八月五日、干害対策費二二万七三二〇円の支出を可決した。

県は九月七日、干害応急対策として、日の出、日没前に土瓶水を稲田に配水するよう各学校へ通達、学童たちが洗濯水を水稲の根元にかける光景が見られた。

九月八日～九日にかけてひと雨(引田町五五・五ミ)あったが、水稲の回復には既に遅かった。

小海村は干害対策として、用排水路を昭和一五年度より三か年計画で、主要部全部の改修を行った。溜池改修の件では、新平池・仁池奥地の浚渫前搗工事を施行した。食料買入れの件として、本村は干害により稲作の八割が減収し、食糧米が不足するので、政府米その他の米を至急買入れの斡旋の必要があると、一〇月二十七日、県費補助に関する文書を提出した。

七 昭和二八年(一九五三)九月馬宿川決壊

台風一三号(テス)は、二五日一〇時室戸岬の南東約一五〇キロの海上に達し、一四時三〇分潮岬の南東海上を

通過し伊勢湾に進んだ。引田町は台風を中心進路から離れていたため、強風による被害はほとんどなかったが、大雨と高潮による被害が大きかった。

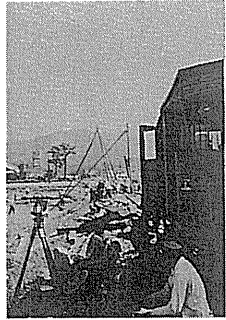
この台風による引田町の雨量は四五〇・一ミに達し、未曾有の大洪水となり、小海川堤防は決壊寸前、別惣川は大洪水となり、暗渠並びに放水路に大被害を受けた。県土木課直営により工費一二五万余円で復旧を完了した(昭和三二年一月に別惣部落に記念碑建立)。

また馬宿川の堤防が、一〇〇ミにわたり決壊、護岸の溢水等により、床上浸水一六〇戸 床下浸水五六二戸田畑冠水三七三歩道路損壊数か所及び大川橋、御幸橋が流失した。鉄道線路は引田～相生駅間は、道床流失のため、国鉄はじめ各交通機関は全く不通となった。溜池はほとんど決壊の危険にさらされ、特に川股池の流域は緊急避難命が出された。なお引田町には「災害救助法」が適用された。

今回の大災害に対し 昭和二八年(一九五三)より災害土木助成工事に着手し、昭和三四年(一九五九)三月その竣工をみた。その記念碑「豊潤」が馬宿川西側堤防道路脇建立されている。

第4章 災害

昭和28年(1953) 9月25日台風13号災害(馬宿川決壊)



線路築堤決壊



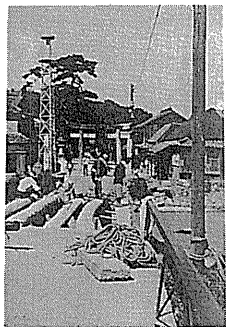
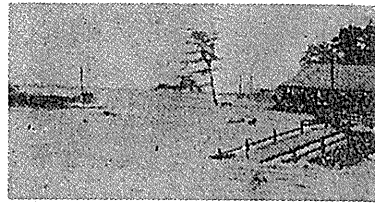
線路土床をあらう濁流



傾き折れた二宮橋



折れ落ちた大川橋



流失した御幸橋



家屋倒壊



道路流失

八 昭和三十六年（一九六一）九月室戸 台風及び一〇月集中豪雨災害

九月一六日午前九時すぎ室戸岬に上陸した台風一八号は、県下全域を暴風雨圏に包んだまま五時間にわたって荒れ狂った。特に東讃・小豆島地方に大被害をもたらした、四国東部をかすめて、近畿地方に再上陸し北東に進んだ。

この台風は、昭和九年（一九三四）九月の室戸台風に次ぐ第一級の猛烈な台風で、その規模・経路が類似している点から第二室戸台風と命名された。

台風の中心に近かった引田町は、三九三^ミの記録的な豪雨となり、町全域を水没させ、山手一帯は崖崩れ、河川は氾濫、田畑は冠水した。また、海岸地帯では高潮のため防波壁や堤防が決壊した。

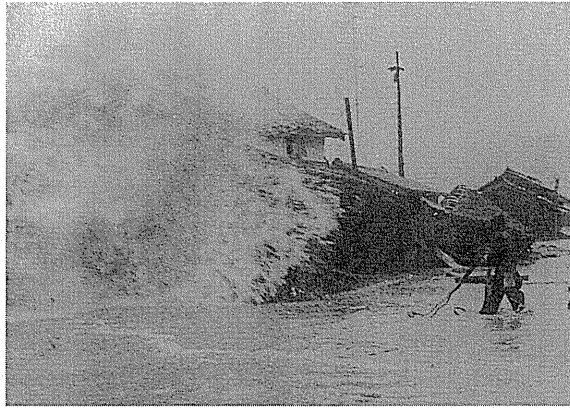
当時の町内の状況は、昼前から台風コースに巻きこまれ、午前一〇時ごろから一層風雨が強まり、正午ごろには、屋根瓦が吹き飛び、大樹の枝は折れ大荒れの状態となった。交通機関はストップし、町内を消防団員や、大内署員が救助作業にかけまわった。災害は予想外に大き

く、午後二時ごろ馬宿川堤防が決壊、洪水と満潮時が重なり、防波壁、堤防が三〇〇^ミに及んで決壊した。倒壊家屋四三戸・半壊三三戸・床上浸水六〇〇戸・床下浸水七〇〇戸・その他田畑・道路・河川等の被害甚大となった。

この災害に県は一六日午後五時、引田町に「災害救助法」を適用し、「災害対策本部」を役場に設けた。同日夜自衛隊の作業隊三六六名の出動があり、一六日～二三日の八日間にわたり 延べ八〇〇^ミ以上の馬宿などの護岸応急補修工事・重量障害物の排除、石や砂利の取りのけ、二子池の潮止め、道路整備、倒壊家屋の整理などの復旧作業に従事した。その使用した土のう二万五〇〇〇袋土量一五五立方^ミに達し、延べ二〇〇〇人が作業に参加した。引田町の災害が報道されると、連日各地から現金や救済物資が各種機関を通じたり、直接役場へ送り込まれた。

また、一〇月二六日～二七日にかけ、引田町は雨量三三^ミの集中豪雨に見舞われ、復旧途中の災害箇所が再び危険にさらされた。この大雨は沖繩付近に発生した低気圧が発達しながら四国東部を通り北東に進んだため、

昭和36年（1961）9月16日第2室戸台風災害



高波が堤防を突破し、倒壊寸前の家屋（馬宿午後2時）



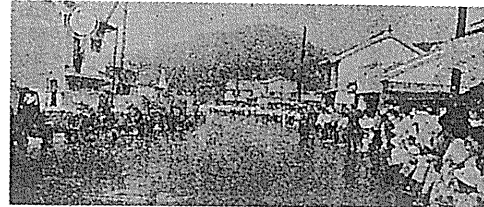
浸水倒壊家屋の街を巡回する消防団員（馬宿海岸） 高潮により護岸堤防決壊（大明神）



海岸に打ち寄せる高波（大明神）



昭和36年（1961）10月26日～27日集中豪雨災害



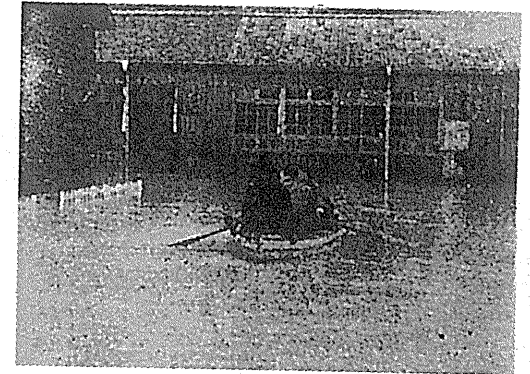
感謝のまなざしで旗をふる人々、3000人の見送りをうけて自衛隊は帰途につく。（9月23日）



全国から送られてきた救援物資



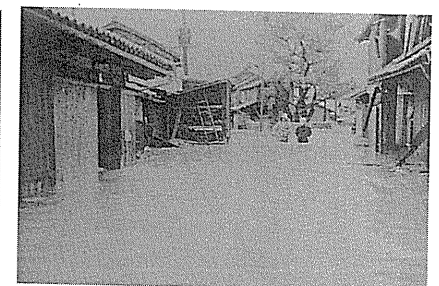
波と人との闘い（松原海岸10月26日）



浸水のためボートが必要だった引田中学校（10月27日）



腰まで漬かる冠水街路



集中豪雨に見舞われ、第二室戸台風の影響を受けていた小海川をはじめ、河川は各所で氾濫し、堤防の決壊、橋の流出が続出した。山崩れ、家屋の浸水など相次ぎ、道路冠水・線路浸水等で交通機関は不通となった。特に稲刈りを終えたばかりであったので、稲束五〇鈔流失したのをはじめ、農作物の被害が甚大であった。また、小・中学校は水害のため登校不能となり、臨時休校となった。このたび重なる災害に対し、連日の調査・協議・陳情を繰り返す町議会と併行して、町役場も休日返上して調査・防疫・物資配分に努めた。

災害復旧工事は、昭和三六年（一九六一）九月に着工し昭和四一年（一九六六）三月に竣工したが、復旧完工碑が相生坂元（国道二一号海岸側）に建てられている。

九 昭和四〇年（一九六五）九月台風災害

典型的な秋台風二三号が激しい風雨を伴い、一〇日午前八時三〇分、高知県安芸市付近に上陸、その後北東に進み引田町を通過し播磨灘に抜けた。風雨は午前五時ごろから強まり、一〇時過ぎがピークとなり、特に東讃・

小豆島を中心に各地で風水害による被害が続出した。引田町は台風の中心が通ったが雨量は一九二ミリである。家屋全壊一戸・一部破損八〇戸・床下浸水二〇〇戸・田畑冠水二鈔等の被害に終わったが、農作物の被害は大きかった。

台風二四号は室戸岬の南海上に接近し一三日～一七日にかけて四国南岸の前線を刺激したため県下全域に記録的な大雨が降った。

引田町の雨量は六六五ミリで一年間の総降水量の約半分の量が五日間に降ったことになる。床下浸水四八戸・水田冠水八五鈔、山崩れ一か所等、農作物の被害は甚大であった。

一〇 昭和五十一年（一九七六）九月一七号台風災害

九月九日、沖繩東海上を北上してきた台風一七号は、一〇日夜から一二日午前中にかけて九州南西海上で約三〇時間、大型の強い勢力を維持しながら停滞状態を続け、太平洋高気圧の縁に沿って南から流入する高温多湿の気流と、台風から流れる雨雲が四国地方に向かい、西

第1編 自然・環境

日本上空に停滞する前線の活動を強めた。このため、八日午前10時ごろから降り始めた雨は、正午には県全域に広がり、引田町で100mmの降雨を皮きりに八日―三日にかけて、県東部を中心に未曾有の大雨となった。「引田地域気象観測所」の資料によると、引田町の雨は八日午前11時過ぎから降り出し、降水量は八日100mm、九日92mm、一日三六九mm、一日二八mm、一二日二mmである。停滞状態を続けていた台風は、一二日夜から九州西岸を北上し始め、午前一時四十分長崎市付近に上陸後日本海に抜けたため、一日は五mmとなり午後一時ごろには止んだ。

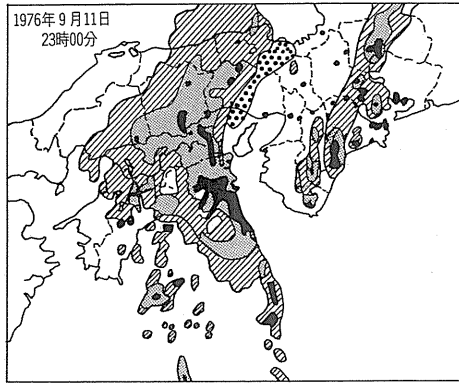
八日―三日の六日間の総降水量は1105mmの記録的な大雨となり、引田町のほぼ一年間(1240mm)の降水量がひと雨で降ったことになる。

また、一時間雨量92mm、三時間雨量120mmである。この記録は「引田地域気象観測所」開設以来の集中豪雨である。このため、町内は水浸しの陸の孤島状態となり、国道はじめ道路はすべて閉ざされ、被害状況の把握も困難を極めた。

河川の溢水・決壊による家屋の床上・床下浸水・道路

第4章 災 害

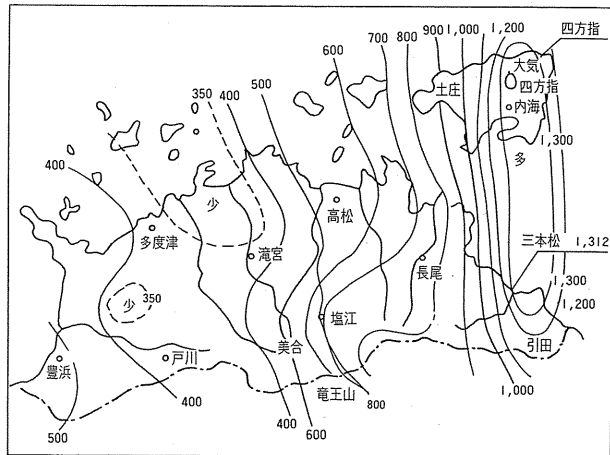
レーダーエコーの合成図(9月11日午後11時)南から北上する強い雨雲が四国東部に集中する。



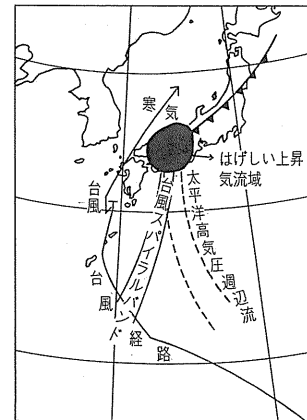
損壊・農作物及び高德線白鳥―引田駅間の築場流失等の被害が続出したが、公私設消防団並びに住民の災害に対する適切な判断と夜を徹しての行動力によって、人身事故が皆無であった。

足谷川は、台風襲来のために水害と闘ってきたが、今回の台風により河川が決壊、石引川の氾濫等により地区全域に甚大な被害を被った。このため、地区住民は自治会を中心に「足谷川災害対策委員会」を結成し、大改修

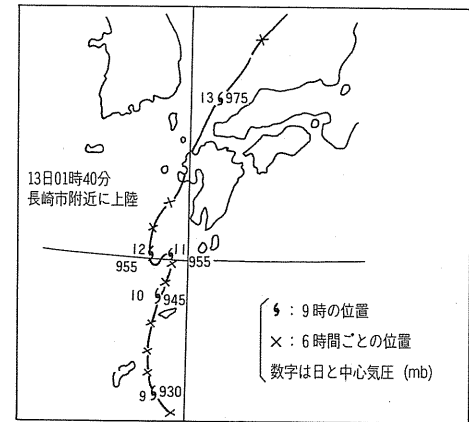
台風17号による総降水量分布図(mm)9月8日～13日
小豆島と県東部が1000mmを超える豪雨



台風17号の豪雨の機構図



台風17号の経路(9月9～13日)九州南西海上で約30時間ほとんど停滞



第1編 自然・環境



引田小学校正門前から引田駅を望む浸水状況
(9月11日)

の運びとなつた。総工費二億一〇〇万円をもって全長一三六〇坪の工事を施行した。その記念として「足谷川改修記念碑」が昭和五九年（一九八四）五月に建立された。